



地域と地球を えーとこにしょーでー!! E S D

社会科教育講座 准教授 河本 大地

「えーとこにしょーでー」は、私の故郷の岡山弁で「いいところにしようよ」という意味です。奈良教育大学で取り組んでいるESD（持続可能な開発のための教育）に関連する形で、経験や研究の一端を紹介합니다。

1枚の地図から

大学3年の夏、私は南アジアへの旅に出ました。きっかけは、通っていた大学の研究室の床に落ちていた1枚の地図。ここに絶対行きたい!と思ったのです。調べたら、そこはネパールの山村でした。尾根上に集落があり、谷底には広大な湿地のある山間の村。初めての途上国への一人旅になりました。

右の写真は、その村を離れる時に寄ってきてくれた子どもたち。バックの景色を「Rice terraces (棚田!)」と紹介してくれたのには驚きました。

国際ワークキャンプ?

ネパールの山村で強く感じたのは、故郷の40年前の姿にそっくり!ということでした。実際、現地の写真を日本で高齢の方にお見せすると「懐かしい」という言葉が出てきます。しかしそれは、40年後の

ネパールの山村が日本の山村のように過疎化すること。日本は陸地の3分の2が森林の山国ですが、はたして世界の未来がそこにあるのか…? もっと日本の農山村が持続的にならないとまずいよな…。

そんなことを思っていた私を、環境教育や農の暮らしなどに取り組む方々が国際ワークキャンプに誘っていただきました。場所は広島県庄原市。築350年の元庄屋宅に世界各地のボランティアと2週間寝泊まりしながら、荒れ放題になった人工林を手入れするというものでした。その後、私は何年もここに関わりました。リーダーを務めた年には、杉を間伐し、里に下ろし、皮をはいで、グループごとに思い思いの形のベンチを作り、自分たち



クローズアップ

の名前を刻み、地元のバス会社に寄贈し、バス停に置いて木の温かみと山の手入れの重要性を知ってもらおうというワークをしました。合間の時間はすべてグローバルとローカルをつなぐ交流でした。

学生時代の研究

そろそろ研究の話に移りましょう。私が卒業論文で扱おうと思ったのは、「普通の田舎」にある、見過ごされている「宝物」。当時、広島大学に通っていた私は、広島周辺の茅葺き民家の分布の変化と存続要因に着目しました。しかし、空中写真で屋根が茅葺きかどうかを判断するのは困難でした。そこで思いついたのが、前年に旅した岩手県遠野市の「南部まがりや」。上から見てL字型のこの家屋様式は、人と馬とが一つ屋根の下で暮らしてきた名残です。1948年米軍撮影から近年に至るまでの空中写真でひたすらL字型とそうでない家屋を識別し、マッピング。現地では50日間、4世代同居の方のお宅に「小さい子への絵本の読み聞かせを每晚すること」を条件に居候させてもらいながらフィールドワークを行いました。

大学院では、「持続可能な開発」や「持続可能性」が世の中で理念的に強調されていることが気になり、その代表的存在のひとつである有機農業と、地域の社会経済との関わりを研究したいと考えました。修士論文では、日本の有機農業の特徴と、有機農業を行政や農協が中心となって早くから推進してきた宮崎県綾町の状況を調べました。博士

論文ではそれを発展させ、「世界の南北問題」と有機農業の展開との関わりを、スリランカをフィールドに研究しました。

神戸の大学、^{おじろ}小代との出会い

博士論文を書いている頃、一通のメールが届きました。タイトルは、「新設大学専任教員就任のお願い」。神戸に観光文化学部のための新しい大学を設立するので関わって欲しいとのことでした。しかし世の中はそんなにうまくいくことばかりじゃありません。その大学を運営していた法人は経営難に陥り、大学設立の8年後には学生募集停止。学生と教員の多くは別の大学に引き継がれ、私のいた大学は廃止に至りました。とはいえ、海辺の新しいキャンパスでのクリエイティブな仕事や学生たちとの時間は、実に喜怒哀楽に満ちていました。

その大学で出会った場所のひとつが、小代。兵庫県の職員さんらと一緒に訪ねたのがきっかけとなり、観光振興や地域づくりに関わらせていただくことになりました。全国の黒毛和牛の99.9%以上を子孫とする名牛を育んだすごい地域…ということは当時まったく知りませんでした。山の暮らしのすごみやストーリー性を生かした取り組みを地元の方々と育んできました。250回以上はお邪魔していると思います。「日本で最も美しい村」連合への加盟や、国際ワークキャンプの実施も地域の方々と一緒に行いました。



大学院生の頃の私。ドイツのベルリンにて、日独ESD地理教育プロジェクトに参加しました



スリランカの有機プランテーション茶園で働く女性たち

学生が地域について学ぶ場としてもお世話になってきました。空き家をお借りし、そこを拠点に四季それぞれに合宿を行いました。その後、前の大学の卒業生が2人移住し、地域の方々のお世話になりながら、自然学校の職員や地域おこし協力隊員として精力的に動いているのはうれしいことです。奈良教育大学でも、小代にお邪魔する「フィールドワークで地域に学ぶ」という教養科目を設けました。人数制限がありますが、興味のある学生はぜひ履修してください。



小代にて。
前の大学のゼミ生たちと

地域多様性を生かした未来づくり

日本は今、国全体の人口が急減・高齢化するという、過去に経験のないステージに入っています。そんな中、明治以降の「近代化」や、高度経済成長期、バブル絶頂期の感覚のまま物事にあたるのは、明らかに間違っています。

地域はどうでしょう？この文章で触れてきた日本の農山村は、人口の減少や高齢化の先進地域。最近、私がよくお邪魔している奈良県南部もそうです。それらの地域は、もう終わりなのでしょうか？価値のない空間でしょうか？私は違うと思います。現に、こうした地域を選び取って都会から引っ越し、暮らす人がいます。「仕方なく」ではなく、そこが好きでUターンする田舎生まれの若者もいます。そこでは、人の多く暮らす都市部とはまた違った未来が創り出されつつあります。

大事なのは、深く掘り下げる「根っこ」のような地域をどこかに持ち、地域を見る目や社会と関わる能力を磨くこと。そして、地域と地域をいろいろな場面でつないでいくこと。この2つが地域の「持続可能性」を大きくします。それを実現するには、どの地域でも共感を大事にしながら「暮らし甲斐」と「関わり甲斐」をつくっていくことです。

今回は主に農山村地域をとりあげましたが、ならまちに代表される歴史ある中心市街地や、大都会の下町やニュータウン、さまざまな民族の混在する地域、漁村、海辺のリゾート地、鉱山集落、伝統工芸品の産地、さらにはいわゆる被差別部落でも、それぞれの未来を創り出せるはず。

「地域と地球をえーとこにしょーでー (ESD)」の取り組みを、これをお読みのみなさまと一緒に進めていきたいです。



プロフィール

社会科教育講座

准教授 こうもと だいち 河本 大地

専門は地理学、農山村地域研究、観光・地域づくり、ESD。

地域の多様性を活かして社会の未来を創るための実践的研究に取り組んでいます。

広島大学にて2007年に博士(文学)を取得。

神戸夙川学院大学観光文化学部の講師・准教授を経て、2015年より現職。

